いきものがかりの言語学 6～当て字

Linguistic Analysis of Ikimonogakari's songs 6 : their substitute usages for Kanji characters

山　田　敏　弘
YAMADA Toshihiro
lingua@gifu-u.ac.jp

１．はじめに

地方国立大学である岐阜大学全学共通教育、いわゆる教養教育の授業で、学生に関心を持たせる「ベターな手法」として J-Pop を用いた日本語学入門の授業を始めたのが、2012 年。その中で、授業者自身が歌詞を評価できる歌い手として授業で用いてきたのが、神奈川県出身でメジャーデビュー10 年目にして長期「放牧」された３人グループいきものがかりである。今回も、彼らの楽曲を取り上げ分析を試みる。

紀要論文とは言え世に問う以上、専門とする文法的特徴を中心に論じてきたが、授業で題材とするには文法以外の特徴的な点も取り上げていかなければならない。今回は、彼らのこれまでメジャー発表された楽曲 120 曲の歌詞に見られる当て字について、先行研究を手がかりにしつつ、それでも十分でないと考える点については独自の手法によって分析する。

２．当て字とは何か

文字は、本来、言語音との間に特定の結びつきをもつ字形である。その文字には、表音文字と表意文字があることは知られるが、漢字のような表意文字は字形が意味を併せ持つ。日本語において、その漢字本来の音は、所詮、外国語である。その漢字が、日本語として意味をもつには、音自体に意味をもたせるか、あるいは、日本語としての意味をその文字にかぶせるか、いずれかの方法を採るしかない。前者が音(おん)で後者が訓である。すなわち、訓は、そもそも、一部漢字の古音が訓となったものを除きすべて漢字本来の「読み」ではない。

その訓もさまざまである。常用漢字音訓表で認められている訓は、付表にある熟字訓を含めて、日本語における慣用度の高いものというだけであって、ほかの訓を否定するものではない。歴史的に訓の原点は、いわゆる万葉仮名に見られると考えてよいだろうが、以来、漢字という外来表記と、日本語の意味である訓は、多対多の結びつきをもち続けている。そのような多様な関係性をもつ字形と日本独自の「読み」には、平安時代以来、定訓といえる一定の関係が成立している (芮 2015 など)とは言え、表意文字を借用した言語としては宿命的といえる複雑な関係性をもって現在に至る。

上記の意味で、訓に割り当てられた漢字はすべて本来「当て字」ということができようが、今さら定訓を核とした訓全体に対応する漢字表記を当て字と考える人はいまい。慣用が強化した文字と「読み」とのつながりは、すでに文字固有のものとなり、「当てる」という概念にそぐわない。では、この訓を除いた「当て字」とはどのようなものであろうか。

田島(2017:14-16)では、「当て字」について、次のような分類がなされている。

① 漢字の音や訓を利用して書き表す方法

・一音節に対し一字の漢字をあてる方法

訓と音とによる交用　例　「夜露死苦（よろしく）」

漢字音ばかりの利用　例　「支留比亜（シルビア）」

・二音節が一字に対応する漢字を用いる方法
訓と音とによる交用　例　「夏得（なっとく）」、「落度（おちど）」、「呑気（のんき）」
漢字音ばかりの利用　例　「友罪（ゆうざい）」、「上喜元（じょうきげん）」

②　語の意味を熟字で書き表す方法
例　「小豆」、「大人」、「足袋」、「土産」、「紅葉」など

③　①と②の両方にまたがるもの
例　「蔵粋(くらしっく)」、「混凝土(コンクリート)」、「倶楽部(クラブ)」、「型録(カタログ)」

上記②には、英語をそのまま当てる「憂鬱」と書いて「Blue」と読む（サザンオールスターズ「ピースとハイライト」）方法も含まれると考える。

もうひとつ、田島(2017)には、重要な指摘がある。それは、本来、「振り仮名の部分を歌」うことが、「振り仮名の役目からすれば当然なこと（田島 2017:22）」であるが、桑田作品には「振り仮名が施されていながら、漢字表記の方を歌っている曲がある」ことの指摘である。

(1)　生まれく叙情詩(せりふ)とは　蒼き星の挿話(エピソード)　夏の旋律(しらべ)とは　愛の言霊(ことだま)

（桑田佳祐作詞「愛の言霊〜Spiritual Message〜」）

この中の「挿話」は、振り仮名の「エピソード」ではなく「そうわ」と歌われている。本考察で分析対象とするいきものがかりの楽曲にこのような例は（いまのところ）見られない。

だが、表記と「読み」との関係については、まだ考察の余地があると考えられる。たとえば、常用漢字付表記載の訓でない「彩」に対する「いろ」や、常用漢字付表の熟字訓になっていない「身体」で「からだ」と読むなど、当て字と訓の境界はどこか。そして、(1)にもある「叙情詩」で「せりふ」と読むなど、当て字の効果はどのような指標によって判断されるべきかという２点である。

本考察では、以上の問題点について、いきものがかりの歌詞を題材に、意味と「読み」との関係を考察する。方法として、意味に関与する部分は、『分類語彙表』を用い、それぞれの語のもつ意味を数値化して分析する手法を採る。『分類語彙表』は、国立国語研究所が 1964 年に出版した「語を意味によって分類・整理したシソーラス (類義語集) 」(国立国語研究所コーパス開発センターHP より＝2018/8/3 確認)である。現在では、その増補改訂版が 2004 年に公開され、さらに、データベースが同センターにおいて公開されている。本考察では、このデータベースに記載された語の数値を利用する。

『分類語彙表』において、語は固有の番号をもつ。たとえば、1.5010,01,01,01 の「光」は、分類項目(1)／分類番号(5010)／段落番号(01)／小段落番号(01)／語番号(01)である。分類項目は、1 が体言、2 が用言、3 が形容詞など相言であり、類似の意味をもつ体言と用言は、分類番号から段落番号（あるいは小段落番号）まで同じである（例　名詞「ためらい」＝1.3067,10,01,03 に対し、動詞「ためらう」＝2.3067,10,01,01）。この、語のマイナンバーとも言える数値を比べることは、意味の近さを計る上で、ひとつの尺度となることが予想される。本考察では、この『分類語彙表』の数値を意味の距離を測る上で活用する。

３．当て字と訓との境界

前節で、訓が慣用度によってグラデーションをもつことに示唆した。もっとも慣用度が高いものを、常用漢字音訓表の訓と呼ぶとすれば、慣用度の低いものが当て字（「読み」に合わせれば「当て読み」）であると言えるだろう。では、その境界はどこにあるのであろうか。

３.１　訓と当て読み

いきものがかりの歌詞に、「さよならの向こうに 陽が昇る」(水野作曲「LIFE」)とある。本考察を

読んでいる人であればだれもが、「〜ひがのぼる」と読むであろう。しかし、「陽」に「ひ」の訓は、現行の常用漢字音訓表にない。同様に、「瞳」を、「ひとみ」以外に「め」と読んだり、「辞」を「ことば」と読んだりすることは、すくなくとも常用漢字音訓表に依れば、「常用」でない。

これらは、当て字か訓か、どちらであろうか。「訓」の辞書的意味は、「漢字をその意味に当てた日本語の読み方で読むこと。また、その読み方（『明鏡国語辞典』CASIO EX-word dataplus 3 版＝以下、単に『明鏡』）などとある。共通するのは、本来の読み方でない、すなわち中国語音でない読み方はすべて訓という点だけである。であれば、「陽（ひ）」も「瞳（め）」も「辞（ことば）」も訓であり、違いは慣用度でしかない。ちなみに、「陽」に対する「ひ」と「辞」に対する「ことば」は、常用漢字音訓表にはなくともハンディな国語辞書『明鏡』にはある読み方である。

いきものがかりの歌詞から例を挙げる。

(2)　つぶらな瞳に惑わされる　そしてまた日は沈むの　（山下作詞「秋桜」）
(3)　不埒な柵をほどき　あたしの胸は疼き出してく　（山下作詞「秋桜」）
(4)　遍く理想　心は無想　声に出したなら砕けよう　（山下作詞「秋桜」）
(5)　その瞬間に　その一瞬に　心が爆ぜた　（山下作詞「最後の放課後」）
(6)　かなえたいことばかり　それでもね　描ききれない　（水野作詞「Good Morning」）

下線部は、順に「め」、「しがらみ」、「あまね(く)」、「は(ぜた)」、「か(き)」と読む。たしかに、「柵」や「遍く」を振り仮名なしで読めと言われると読めない場合もあるかもしれない。それは、語句として、「しがらみ」や「あまね(く)」を知らないということであり、漢字と訓との結びつきの難易度ではない。「描く」の読みである「かく」は、2010 年の常用漢字改訂以前には音訓表外であったものが新たに認められた訓であり、作詞当時にはまだ表外訓であった。今後、上に挙げたようなすでに慣用として認められているものは、この「描く」の「かく」のように、常用漢字音訓表に取り入れられていくことが予想される。いずれにしても、(2)を除くこれらは訓であって「当て読み」ではない。漢字が容易に打てる時代となった今、より広く訓を認めてもよいことは、J-Pop が示している。

ただし、意味の変化を伴う場合には、要注意である。この中で「瞳」は、「め」とも読む一方、「ひとみ」とも読む。また、「ひとみ」は、「瞳孔」、つまり黒目の部分を第一には指す。このため、完全に同義とは言えない別義であるとの考え方もある。(2)の「瞳（め）」は、確かに「瞳孔」かもしれないが、次の(7)では、「め」そのものである。

(7)　曖昧なあたしを壊して　静かに瞳（め）を開じる　（山下作詞「残り風」）

「瞳孔」は、常人に知覚される程度において、閉じるものではない。つまり、この「瞳」は「目」である。「瞳」という字が本来的に指し示す概念と、「目」という読みが指し示す概念とは、別物である。『分類語彙表』でも、「ひとみ」＝1.5601,20,01,01、「め」＝1.5601,16,01,01 と、段落番号が 04 異なる。もちろん、「瞳」は「目」の一部であるから、提喩と捉えることもできる。意味の拡張を、今、問題視するつもりはない。本来、異なる部分に当てられた漢字が、あえてより複雑な字形を用いつつも、読みとしての「め」を保持していることが興味を引くだけである。

このように漢字と読みとがそれぞれ指し示す概念にずれがある場合に、それを「当て字」と呼ぶことがひとつの基準となる。つまり、訓とは、漢字が指し示す語の意味と読みが指し示す意味とにずれがない場合であり、当て字とは両者に段落番号以上のずれがある場合と考えることができる。

この基準によれば、上に挙げた「彩」を「いろ」と読むのは、当て字である。「彩」ということばには、「斜めに交わった線が作り出す模様」（『明鏡』）、あるいは、そこから派生した「文章表現上の巧み

な言い回し。また、表面的なことばの飾り」（同上）の意味はあっても、「いろ」の意味はないからである。しかし、これは「あや」の意味であり、漢字本来の意味ではない。「彩り」が「いろどり」と呼べるように、「色の取り合わせ」の意味が「彩」にはある。とはいえ、これは「取り合わせ」がなければ「彩」とならない点で、「彩」は「いろ」自体ではない。やはり当て字と考えるべきである。

３.２　熟字訓と熟字当て字

熟字であっても同様である。「身体」を「からだ」、「黄昏」を「たそがれ」と読むことに、だれも疑問を抱かない。常用漢字音訓表付表にある熟字訓は、下記のものに限定されており、包括的ではない。

明日(あす)、小豆(あずき)、海女(あま)、硫黄(いおう)、意気地(いくじ)、田舎(いなか)、息吹(いぶき)、海原(うなばら)、乳母(うば)、浮気(うわき)、笑顔(えがお)、叔父・伯父(おじ)、乙女(おとめ)、叔母・伯母(おば)、お巡りさん(おまわりさん)、お神酒(おみき)、母屋・母家(おもや)、神楽(かぐら)、河岸(かし)、風邪(かぜ)、仮名(かな)、蚊帳(かや)、為替(かわせ)、河原・川原(かわら)、昨日(きのう)、今日(きょう)、果物(くだもの)、玄人(くろうと)、今朝(けさ)、景色(けしき)、心地(ここち)、居士(こじ)、今年(ことし)、早乙女(さおとめ)、雑魚(ざこ)、桟敷(さじき)、差し支える(さしつかえる)、五月(さつき)、早苗(さなえ)、五月雨(さみだれ)、時雨(しぐれ)、竹刀(しない)、老舗(しにせ)、芝生(しばふ)、清水(しみず)、三味線(しゃみせん)、砂利(じゃり)、数珠(じゅず)、上手(じょうず)、白髪(しらが)、素人(しろうと)、師走(しわす)、数寄屋・数奇屋(すきや)、相撲(すもう)、草履(ぞうり)、山車(だし)、太刀(たち)、立ち退く(たちのく)、足袋(たび)、稚児(ちご)、築山(つきやま)、梅雨(つゆ)、凸凹(でこぼこ)、手伝う(てつだう)、伝馬船(てんません)、投網(とあみ)、十重二十重(とえはたえ)、読経(どきょう)、時計(とけい)、友達(ともだち)、仲人(なこうど)、名残(なごり)、雪崩(なだれ)、兄さん(にいさん)、姉さん(ねえさん)、野良(のら)、祝詞(のりと)、博士(はかせ)、二十・二十歳(はたち)、二十日(はつか)、波止場(はとば)、一人(ひとり)、日和(ひより)、二人(ふたり)、二日(ふつか)、吹雪(ふぶき)、下手(へた)、部屋(へや)、迷子(まいご)、真面目(まじめ)、真っ赤(まっか)、真っ青(まっさお)、土産(みやげ)、息子(むすこ)、眼鏡(めがね)、猛者(もさ)、紅葉(もみじ)、木綿(もめん)、最寄り(もより)、八百長(やおちょう)、八百屋(やおや)、大和(やまと)、弥生(やよい)、浴衣(ゆかた)、行方(ゆくえ)、寄席(よせ)、若人(わこうど)　(常用漢字音訓表付表より)

これらは、基本的に、「紅葉」を「こうよう」、「大和」を「だいわ」など、少数の例外を除いて、その他の読み方がないほど固定化されている点で特徴的である。ただ、これらの訓が、２字以上の漢字、もしくは平仮名との組み合わせにおいて認められているとすれば、１字の漢字に当てられた訓よりも、非常に狭く採られていると言わざるを得ない。また、時代に応じた改訂もおろそかにされている。

たしかに、常用漢字音訓表は、その「前書き」に、目安でしかない旨、謳っている。ただ、公文書や一部準拠する新聞などでは、この音訓表の採録を使用の限界値としているものもあり、制限的でもある。熟字に関して、より広く認める方向で常用漢字音訓表の改訂がなされるべきである。

その理由は、J-Pop の歌詞を見るとよくわかる。常用漢字表付表の熟字訓として採られていない「読み」が、振り仮名が付されることなく使用されている。いきものがかりの歌詞から例を挙げる。

(8)　僕らはまだ生きてく 愛の<u>欠片</u>をまた探して行く　（山下作詞「マイステージ」）
(9)　わたしはただ幸せという甘い<u>陽炎</u>に魅せられたの　（水野作詞「陽炎」）
(10)　<u>今宵</u>の涙は全て雨に変わるわ　（山下作詞「くちづけ」）

下線部は、順に「かけら」、「かげろう」、「こよい」と読むが、この注釈すら不要なほど、訓として確立していると言ってよい。ほかに、上記、「黄昏（たそがれ）」と「身体（からだ）」に加え、「明日（あした）」、「秋桜（コスモス）」、「台詞（せりふ）」なども付表にはないが、通常、そう読まれるべき熟字であり付表に加えられるべきものと言ってよい。

悩ましいのは次のような名詞である。名詞には活用がないため、「読み」の併記が必要となる。

(11) 現在(いま)を抱きしめて　未来に恋して　（吉岡作詞「GOLDEN GIRL」）
(12) 僕等が駆け抜けた時期(とき)　明日へと向かう旅　（山下作詞「心の花を咲かせよう」）
(13) 時間（とき）といま歩き始めたいから　（吉岡作詞「白いダイアリー」）

(　)内は、原歌詞に付された「読み」である。この読みの併記がなければ、「げんざい」、「じき」、「じかん」と読まれることが優先される。これらは、熟字訓か当て字（当て読み）か、どちらであろうか。

上に取り上げた『分類語彙表』の基準で言えば、「現在」も「いま」も 1.1641,01、「時期」も「とき」も 1.1611,12、「時間」も「とき」も 1.1600,01 である（「とき」には、「時刻」と「時間」のほか「場合」の意味もある）。それぞれ意味の差がないことから、これも熟字訓と認めてよいことになる。しかし、やはり、「いま」や「とき」に対する「現在」、「時期」、「時間」は、当て字と捉えるであろう。それは、より固定された同義の表記が別にあるからである。

「運命」と「永遠」はどうであろうか。(14)「運命(さだめ)」は、歌詞カードのままである。

(14) 憂うべき運命(さだめ)に何を祈る　（山下作詞「恋詩」）
(15) 偽らない運命が今日もその存在を示してる　（山下作詞「@miso soup」）
(16) 永遠の感動に出逢えるんだよ　（山下作詞「いつだって僕らは」）
(17) 「出逢った場所」も「今いる場所」も　永遠に心と繋がっている　（水野作詞「茜色の約束」）

いきものがかりでは、「運命」は、基本「うんめい」であり、「さだめ」は、(14)のみである。笹原編(2012)によれば、「運命」を「さだめ」と読む例は、1931 年の古賀政男「影を慕いて」に見られるとあるが、『分類語彙表』では、「さだめ」に「決定」の意味(1.3067,06)と、「規定」の意味(1.3080,12)があるのみで、「運命」の意味は見られない。「運命」の意味は、「定め」に最後に派生した意味であるためであろうか。また、「とわ」と読む「永遠」も、 (17)のほか、山下作詞「心の花を咲かせよう」に見られるが、基本は「えいえん」である。(16)(17)の例からもわかるように、どちらで読むかも歌詞カードに明記されない場合が多い。数量的に検証は今のところできていないが、この変化を考えることは、熟字訓の発生と広がりを考える上で重要な示唆を与えるであろう。別稿を期したい。

なお、先に、熟字訓の名詞性について述べたが、動詞（になりうる語）の場合は、比較的、熟字訓が成立しやすい。送り仮名によって読みが推察できるからである。「躊躇い」や「微笑み」などは、この例である。「ためらい」も「躊躇（ちゅうちょ）」も、『分類語彙表』では、2.3067,10 となっており、熟字訓の範疇であると考えられる。

３.３　まとめ

このように、常用漢字音訓表とその付表を離れて、「読み」をどう捉えるか。そこには、別の基準がなければならない。つまり、熟字訓と呼ぶには、①漢字個々に当てられた音訓の総和以外の読みが熟字に社会慣習上あり、かつ、②『分類語彙表』の段落番号が同じである場合である場合に限られる。それ以外は、当て字と考えることができる。

このような訓と当て字の境界については、すでに、どこかに書かれている内容かも知れないが、門外漢故、CiNii で調べた限りの管見にしてその知識をもたない。されど、以下の考察をするために重要な点であるので、ここで上記の通り確認し、以下、当て字としては、『分類語彙表』の段落番号以上にずれがある場合を取り上げることとする。

４．いきものがかりの当て字の分類

「プラネタリウム」には、次のような歌詞がある。

(18) 願いは　想いは　揺るぎない閃光（ことば）を伝えていくから　[中略]
　　願いは　想いは　終わらない生命（せかい）を夢見てしまうから
（水野作詞「プラネタリウム」）

(18)の「閃光」を「ことば」と読むなどは、当て字としても独創的である。このような当て字は、めったに用いられない点で新奇さはあるが、同時に奇異でもある。では、どの程度の意味の遠さがあれば、まっとうな当て字と言えるのか。また、この奇異さの意図は何か。そこを考えることによって、いきものがかりの歌詞の独自性を考えたいというのが本節の目的である。

４.１　表記と読みが大きく乖離する場合

(18)のほかに、もっとも当て字らしい用例として挙げられるのは、次のような例である。

(19) 今日だって　いつか　大切な　瞬間(おもいで)　（水野作詞「ありがとう」）
(20) あざやかに共鳴(ひび)く　友たちの声は　今でもこの胸に伝う　（水野作詞「スピリッツ」）

『分類語彙表』では、「閃光(1.5010,04,01,05)」は、言語活動である「ことば(1.3100,02,01,01)」との差が 0.1900 以上ある。同じ 1 で分類される体言であるということ以外、「通常であれば表記と意味が結びつかない関係」と捉えられる。「生命」＝1.5700,01 と「せかい」＝1.2600,04 も同様である。また、「ありがとう」の「瞬間」＝1.1600,11 も、「おもいで」＝1.3050,18 とは、分類番号が大きくことなる（差＝0.1450,07）。動詞の場合も同様で、(20)の「共鳴する」＝2.1510,05 に対し、「ひびく」＝2.3001,04 と、差が-0.1490 と大きい。「共鳴する」には、「響く」にない相互性が含まれる。

さて、この数字の差は何を示すのか。国立国語研究所の Web ページ「研究室から：『分類語彙表』増補改訂版について」(2018/8/3 確認)には、「シソーラス」の説明として、「意味を基準にして言葉を集めて配列するには、なんらかの工夫が必要になってきます。例えば、ひとつの言葉のグループの中にさらに小グループを作るとか、関連する言葉のグループを相互に参照できるようにするなど」とある。『分類語彙表』もシソーラスであり、この基準を当てはめれば、近い意味の語句どうしは、近くに並べられ数値の差分も小さいことが推察される。反対に、上のように、分類番号に差がある場合、聴き手(読み手)は通常でない読みと捉え、「当て字である」と感じることとなる。なお、国立国語研究所の Web ページ(同上)に、「意味には原則として特定の順序が存在しない」と述べられているように、このマイナスには意味がない。重要なのは、表記と読み、それぞれの意味分類の差分の絶対値である。

このような意味の乖離が大きい当て字は、どのような効果を生むのであろうか。上に挙げたそれぞれのペアの数値の差は、通常なら結びつかない２語を結びつけた作為である。その「違うものをあえて結びつける」恣意こそが作詞者の創意工夫と感じられるのである。いきものがかりでは、水野がこの技法を多用する。

では、水野の(18)から(20)のような創意工夫が、どのようにして歌詞の中で活きるのか。歌なのであるから、まず伝わるのは音声である。(19)で言えば、「今日だって、いつか大切な想い出（になる）」というメッセージが伝わる。歌詞における当て字は、多くの歌詞カードを読まない人にとっては、伝わらない暗号となる。シングル曲としてテレビ映像で見たりすることで、「今日だって、いつか大切な瞬間」であり、その一瞬一瞬の積み重ねが想い出であると、「想い出」の経験的なイメージが歌い手と聞き手で共有され、秘められた意図が解読される。(20)の「あざやかに共鳴する友たちの声」と「あ

ざやかに響く友たちの声」も、同様である。(18)も、「願いは、想いは、揺るぎないことばを伝えていく」とは言えるが、「揺るぎない閃光を伝える」では意味が採れない。歌われる音としてことばが本来のことば（意図）なのであり、その現象が「閃光」のごとく短いものとのイメージを与えているのである。

以上、見てきたように、当て字の第一の機能は、語句のもつ概念的意味に加えて、内包的意味を加えることである。

意味的乖離が大きい当て字には、よくわからない結びつきもある。

(21)　まだ見ぬ革新(あこがれ)を　高鳴る胸に　求めて　（水野作詞「熱情のスペクトラム」）
(22)　夜明けの時代(ゆめ)にも　心つなげたくて　（水野作詞「会いにいくよ」）

(21)においては、意味的に「革新」＝1.1500,20 が「分類,段落,小段落」の順に「関係,作用,作用・変化」であり、「あこがれ」＝1.3020,15 は「活動,心,好悪・愛憎」である。音から考えれば、「あこがれ」という心の変化を、事物の関係性の変化になぞらえている点が、二重の意味を結びつけている効果と感じられるのである。これも、ぎりぎり、内包的意味付加の延長線上にあると捉えられるだろうか。一方の(22)では、「ゆめ」＝1.3003,12 と「時代」＝1.1623,01 が、どのような関係にあるのか、理解しがたい。前文脈にある「時代(とき)」との関係性を併せて考えても言語学の領域では答えは出ない。

このように、表記と読みの大きな乖離は、作者の創意工夫は読み取れても、実際、その使用意図までは理解しがたいこともある。

４.２　表記と読みの意味が近似する場合

４.１節に見たように、表記と読みという２語がそれぞれもつ意味の距離が遠すぎれば、当て字は臨時的で特異な用法となる。作為が目立ちすぎるとも受け取られる。一方で、下世話な言い方で「これはありだな」と思わせる当て字も、いきものがかりの楽曲では多く用いられている。

もっとも典型的なものは、先にも挙げた(11)〜(13)である。紙幅の都合で繰り返し揚げないが、「現在(いま)」（吉岡作詞「GOLDEN GIRL」）、「時期(とき)」（山下作詞「心の花を咲かせよう」）、「時間(とき)」（吉岡作詞「白いダイアリー」）などは、意味のほぼ同一であるにもかかわらず、当て字と考えられる。それは、先にも挙げた、確立された音読みがあることと、訓に対する常用漢字が別にあるためであろう。では、あえて用いる意図、裏返せば、当て字使用の機能は何であろうか。

いきものがかりが使用する当て字全般に、音としては、よりやわらかい訓読みが用いられており、そこに音読みの漢字が当てられる傾向にあることは指摘できる。ただ、それは、４.１節で挙げた例にも言えることである。ほぼ同義であるペアは、何のために常用を外れて用いられているのか。個別に考えれば、(11)の「いま」は、直前や直後も示し、「現在」とは異なる時間の幅を持つ。より厳密に表すのは、表記の「現在」である。また、(12)でも、「とき」という直線から切り出された線分としての「じき」は、概念的限定である。すなわち、読みの意味の下位概念として文字の表す意味があり、限定していると言える。「頂(ばしょ)」（水野作詞「青春のとびら」）なども、「いただき」＝1.5240,04 と「ばしょ」＝1.1700,07 とは差があるが、「頂点」＝1.1652,05 とは近い。「ばしょ」という読みに、「頂」が当てられれば、その場所が「ゴール」であるという限定を加える。これも意味限定用法である。

しかし、(13)の「時間(とき)」、および、次の(23)(24)は、その機能をもたない。

(23)　咲き誇る明日(みらい)はあたしを焦らせて　（水野作詞「SAKURA」）
(24)　宛ての無い暗がりに　自己(じぶん)を探すのだろう　（水野作詞「YELL」）

「明日」＝1.1643,06 と「みらい」＝1.1643,01 とは、分類番号は同じだが、それ以下が異なる現在時以降の時間区分である。「みらい」という半直線を「明日」という時点に区切る点では、意味限定にも通じるが、実際、比喩的には「明日」が「未来」の意味にもなり、ほぼ同義ともなる。また、「自己」と「じぶん」の関係も、上位・下位ではないほぼ同等のことばである。「自分に問いかける」は「自己に問いかける」ことであり、「自分を振り返る」ことは、「自己を振り返る」ことである。そこにあるのは、文体的な差であろう。「自己管理」と言っても「自分管理」とは言わないなどのことは、偶然の選択と言っていいほど、概念的には近似する。ここに常用を外れる明確な理由は見いだせない。

もう１種類、今回見つけられなかったタイプも想定される。それは、読みの意味の方が表記の表す意味よりも下位の概念を表す例である。(23)(24)を除き、いきものがかりの当て字は、訓読みの音に対して音読みの漢字が当てられていることが多い。漢語は、一般に和語よりも厳密な概念を表す。であれば、この最後の種類は理論的に考えにくい。次のものは、わずかにそのような例であろうか。

(25)　卒業のときが来て君は故郷(まち)を出た　（水野作詞「SAKURA」）

昔は「故郷」が「いなか」であることが一般的であったが、神奈川県民にとって「故郷」は「まち」なのであろう。その意味では「まち」のほうが概念的に厳密である。しかし、同時にさまざまな「まち」に「故郷」という属性を与えている用例でもある。どちらかだけとは言いがたい。

以上、表記と読みの意味が近似する場合を見てきた。ここには、大きな意味的乖離がある場合と異なり、作詞者の創意工夫は感じ取りにくい。しかし、音よりもより厳密な概念を表記で示したり、近似する概念にずらしたりすることで、わずかな作為を読み取ることはできよう。

４.３　外来語訓

外来語に対しても、「カルタ（ポルトガル語 carta より）」を「歌留多」、「こんぺいとう（ポルトガル語 confeito より）」を「金平糖」と書くなど、仮借による当て字と、「煙草（タバコ）」や「洋燈（ランプ）」など意味から字を当てる方法の両方がある。

いきものがかりの歌詞において、このような外来語に対する当て字が見られたのは、以下の通りである。いささか蛇足の感もあるが、ひとつの特徴として挙げておく。

(26)　時雨の秋桜と　ともにちるのでしょう　（山下作詞「秋桜」）

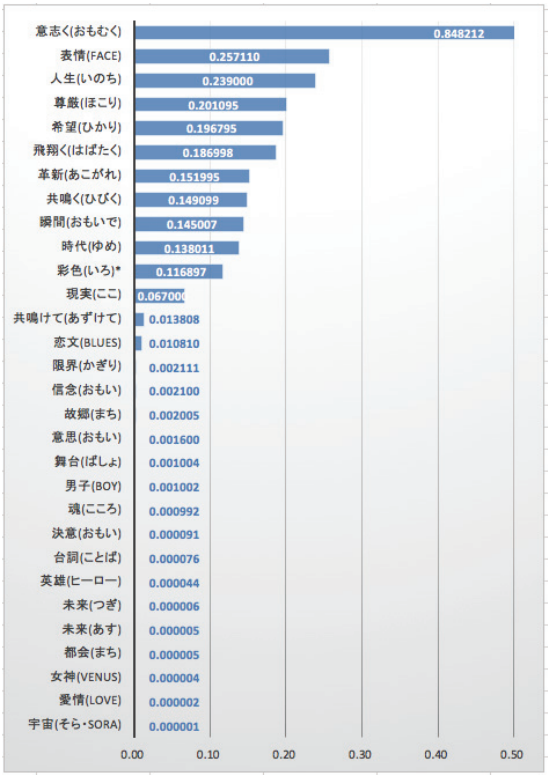
(27)　僕らはいま　英雄(ヒーロー)になる　きっと　きっと　（水野作詞「スピリッツ」）

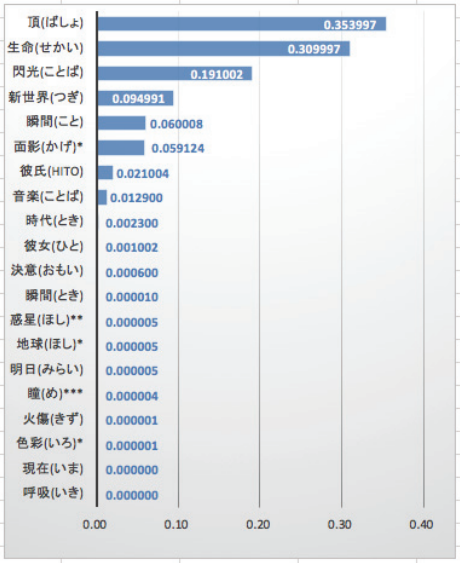
(28)　でも「全然無問題（もーまんたい）！」なんて笑うけど　[中略]
それはただ　それはただ　単純(シンプル)な魔法(マジック)　[中略]
いつも君から届いて欲しいよ　笑顔にしてくれる言葉鍵(キーワード)　（山下作詞「message」）

(29)　女神(Venus)だって　Chu Chu Chu Chu　[中略]
ときめくよな愛情(Love)こころに感動(Good)感じ合いたいから　[中略]
接吻(Kiss)をしたいよ　Chu Chu Chu Chu　[中略]
からまわりの感情(Mind)　とぼけた表情(Face)
いとしの心臓(Heart)に　うぅぅぅ～　BANG！　[中略]
優柔不断な男子(Boy)　いじらしいほど　好きになるよ　[中略]
ときめぎだけ好調(Fine)　愛想は不調(Blue)　信じ合いたいのに　[中略]
キミだけには真実(Truth)　とどけや恋文(Blues)　[中略]
ふたりだけの合図(Sign)　世界は素敵(Shine)　恋がはじけるよ
（水野作詞「KISS KISS BANG BANG」）

(27)と(28)は、読みが付されていることからもわかるように、英語と中国語由来の外来語を漢字に当ててある。(29)も、v が唇歯音であったり th が歯音であったりせず、また基本的に開音節であるなど、発音は日本語であるが、英語が書かれており歌詞カードレベルでは目に付く。ただし、意味に関しては、4.2 節で検討した機能で基本的には説明可能であるが、「素敵(Shine)」などニュアンス付加の用法である例も含まれる。また、(29)の最後の 2 行は、言うまでもなく韻を踏んでいる。

本節で分析した文字と読みについて、『分類語彙表』の数値の差分をグラフに表すと以下のようになる。なお、品詞等が異なるために差が 1 を越えるものは省略する。なお、用例は網羅的でない。





左側は、文字の方が『分類語彙表』において先に出てくる場合の数値の差の絶対値である。右はその逆。違いはない。*は山下の作品に見られ、**は吉岡の作品に見られるものである。***は三人とも使用する例を示し、無標は水野の作品のものである。

グラフ１　いきものがかりの当て字に見られる文字と読みの意味の差

以上、いきものがかりの当て字を分類した。全体的に、音読みの漢字に対し、訓読みの読みが当てられることが多い。歌詞として見れば、開音節の和語中心の音を用いて聞き手に届け、同時に、漢字によって意味を変化させているとまとめられる。その中で、読みの意味と表記の表す意味との、『分類語彙表』上の数値の差が大きければ、意味の乖離が大きいと感じられ、内包的意味の付加用法となる反面、小さい場合には、概念厳密化の用法と捉えられる。2 つの作為がここには感じられるのである。

５．いきものがかりとしての当て字の特徴

さて、ここまで歌詞におけることば（音）に当てられた漢字の特徴という観点から見てきたが、グループとしての特徴を短く見ておく。

いきものがかりの楽曲では、当て字がまったく用いられていない楽曲は、2018 年 3 月現在メジャーレーベルから一般に聴ける形で提供されている全 120 曲のうち 31 曲であった。もちろん、どこまでを当て字として認定するかに依る。次にも述べるように、「今宵」や「何故」、「微笑み」なども、常用漢字音訓表外であり「当て字」であるが、慣用度は熟字訓に次ぐものであり、厳密に数を数えるのは難

しい。それらを数えないとしても、彼らの半数以上の楽曲において当て字という創意工夫が見られることは、歌詞へのこだわりをそこに感じる。

個人差としては、すでに述べたことと重複するが、山下は、上記の「今宵」(6 作品)や「傍(そば)」(5 作品)、「欠片(かけら)」(5 作品：うち 1 作品は水野との共作)など、熟字訓に準ずる慣用性を有するものを頻用する。山下の楽曲は、「雛罌粟(ひなげし)」に代表されるような難読字を用いたり、「遍(あまね)く」、「抉(えぐる)」、「溢(こぼ)した」、「柵(しがらみ)」、「餞(はなむけ)」、「怯(ひる)む」などの常用漢字外の漢字や訓を用いたりするなど、難読である印象を受けるが、実際には慣用の域を大きく逸脱するものではない。一方、水野は意識的に、歌詞としての音にかけはなれた意味をもつ漢字を当ててゆく手法を採る。「決意(おもい)」、「人生(いのち)」、「希望(ひかり)」、「時代(ゆめ)」、「故郷(まち)」など、水野の当て字には、同時に表したい内包的意味が込められている。

このようなメンバー間の多様性も、また、かれらの楽曲の魅力の一つとなっている。

６．おわりに

以上、J-pop グループいきものがかりの全歌詞を対象に、当て字の分析をおこなってきた。その機能は上に述べたとおりであるが、同時に、当て字の分析には、『分類語彙表』の数値を利用する方法が考えられると提案した。

本考察は、音に字を当てるという観点から考察をおこなってきた。それは、歌詞なのであるから、やはり字を見なくとも理解される点で、音が先にあると考えたためである。ここが書きことばを対象とした振り仮名の研究とは異なる。

もちろん、両者は表裏一体とのものであり、歌詞を「書く」側からすれば、歌詞も書きことばなのかもしれない。この点について、今野(2009:124)は、「漢字で書きたい！」という「日本語を『漢字で書く』という志向の潜在的なつよさが窺われる」と述べる。このことを歌詞に置き換えてみれば、音としての「ことば」だけでは十分に意図が伝えられない意味を漢字で示していることもあるが、それだけではなく、こんな意図も隠してあるんだぞという密かな愉しみが、一部の歌詞の当て字には込められていると考えたい。それが、歌詞カードまで見てくれる人にだけ届けばいいという消極的な思いなのか、こんな技法を凝らしているのだから歌詞を読んでもほしいという強い願いなのかは、わからない。意図は作詞者のみが知ることである。

【参考文献】

いきものがかり (2013)『いきものがかり全歌詞集』シンコーミュージック・エンタテイメント

今野真二(2009)『振仮名(ふりがな)の歴史(れきし)』集英社新書

笹原宏之編(2012)『当て字・当て読み　漢字表現辞典』三省堂

芮真慧(2015)「漢字とその訓読みとの対応の歴史的変遷」『国立国語研究所　第 8 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』

国立国語研究所コーパス開発センター「分類語彙表 － 増補改訂版データベース」http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/goihyo.html(2018/08/3 最終確認)